

藤間勘十郎 振付

櫓三番叟

長唄囃子連中

太夫元 加賀屋 歌 江

町娘 尾上梅之丞

下足番 中村紫 若

『櫓三番叟』は、昭和三十三年にご祝儀ものとして明治座開場のおりに発表され、新派の喜多村緑郎、花柳章太郎、水谷八重子で初演されました。太夫元が翁、町娘が千歳、下足番が三番叟に見立ててあり、下足札の紐が三番叟の鈴に見立てられた振付があるなど、洒落た稀な作品であります。

* * *

今回、御宗家自ら指導にあたられた芸恵に浴したのは、歌江・梅之丞・紫若の三人の女形で、羨望これにすぐるものはありません。これに応えるべく三人は真夏日の稽古に汗を流しました。どうぞ、成果をごゆるりとご覧下されませうようお願い申し上げます。

藤間勘五郎 振付

団子売

竹本連中

杵造 松本 幸右衛門

お白 中村京 蔵

浄瑠璃 竹本 葵太夫

竹本 東太夫

竹本 道太夫

三味線 鶴澤 宏太郎

豊澤 菊二郎

豊澤 淳一郎

へ今度 今度仕出しじゃ なっけんけれど——と、曲つきをしながら売り歩く夫婦者の団子売——杵造が白をかつき、お白が杵をもって出てくる。得意の曲搦きを華やかにご覧に入れるのが前段で、ここが面白い。

幸右衛門・京蔵のコンビは、葉月会では始めて、最近めきめきと勉強の成果をあげている京蔵さんが、先輩の幸右衛門さんにかに迫るか見ものである。

このお二人、つい先程さる臨時公演で「文七元結」の左官長兵衛夫婦をつとめた仲のよさ、そのイキのよさが葉月会でも生かされるに違いない。

本舞台へ入っての餅つき、お白の早間の踊りなど、夫婦の息のあった踊りを見せて、

へかくては はてじと女夫連 かしこをさして——と仲のよいところを見せて次の町へ去っていく——。

河竹 黙阿弥 原作による葉月会台本
河竹 登志夫 監修

月梅薫朧夜 四幕六場

持田 諒 演出

序幕 芝居茶屋座敷の場

| | | | |
|--------|--------|---|---|
| 芸者久吉 | 金井 お 象 | 歌 | 江 |
| 一 中節師匠 | 小澤 た え | 左 | 升 |
| 芸 者 | 政 吉 | 京 | 紫 |
| 芝居茶屋 | 女 中 | 京 | 巳 |
| 同 | 女 中 | 吉 | 世 |
| 同 | 若い者 | 東 | 志 |
| 周旋人 | 駒野勇助 | 紀 | 義 |
| 周旋人 | 春山笑蔵 | 光 | 紀 |
| 金貸赤鬼 | 九郎兵衛 | 吉 | 次 |
| 深 見 | 丹次郎 | 勘 | 之 |
| 高砂屋 | 徳兵衛 | 又 | 承 |
| 箱廻し | 巳之吉 | 幸 | 右 |
| | | 衛 | 門 |

をみては九郎兵衛も引きさがらざるをえない。ほっとした久吉も巳之吉も、徳兵衛の俠気には目を見張るばかりだがこの時障子をあけて現れたのは、深見丹次郎だった。
「久吉さん、助け舟のご本尊はこちら様です。」と徳兵衛はさりと云つてのけると、この場の仕儀を解きあかした。丹次郎と久吉は、さる宴会で逢そめてから燃えるような恋に落ちていた。久吉は今あらためて、救ってくれた男への恩慕をつのらせるのだ。た。

明治のご一新は、みるみる東京を変えた。
芸者久吉もご最貞の勧めと父親傳之助の意見をいれ、浜町に待合水月を開業した。
お象は人から女将と呼ばれる身分になったのである。これは傳之助

二幕目 日吉町小澤内の場

| | | | |
|--------|--------|---|---|
| 待合水月女将 | 金井 お 象 | 歌 | 江 |
| 丹次郎女房 | その | 梅 | 之 |
| 芸 者 | 政 吉 | 京 | 紫 |
| 女 中 | こ ま | 歌 | 松 |
| 箱廻し | 千 八 | 錦 | 一 |
| 深 見 | 丹次郎 | 勘 | 之 |
| 一 中節師匠 | 小澤 た え | 左 | 升 |

幕のあくまで
新橋の宇田川屋の店先で、お小遣いをせびるならず者をきっぱりとさばく男振り評判の箱屋巳之吉であった。その巳之吉が、お手あげなのが、久吉姐さんの金の工面、この日も岡惚れの九郎兵衛を、久吉さんに取り持つと安うけ合いをしてうまく金を借り受け、溜まった呉服の勘定を無事すませる事ができた。しかし、当の久吉は夢にもそんな事とは露知らず、ある日最貞のお座敷がかかって芝居のお供、中村座へ出掛けていった。

開幕

ここは中村座の茶屋座敷。幕間の賑やかな客にまじって上がったのは、金貸し九郎兵衛と笑蔵・勇助の三人連れ、早速酒の注文となり、話はおさまりの綺麗どころの噂ばかり。この日に東棧敷に、人気随一の新橋の芸者久吉や、一 中節の名うての師匠小澤たえが若手の芸者政吉をつれて見物にきていた。九郎兵衛は久吉を座敷へ呼ぼうとして、きっぱりと断られる。

「今日はお客様のお供で参りました身、それだけはお勘弁下さいまし」と逃げられたが、そんな事で引き下がる九郎兵衛ではない。呼んだ箱屋の巳之吉へ貸した金の催促にかまけて久吉を攻め立てた。久吉は、この時初めて、九郎兵衛に借金があるのを知ってびっくりし、思わずカッとなって巳之吉をなじった。

「久吉さんの為にしたことではないか」と巳之吉は砂を噛む思いだったが手も足も出ない。その場を救ったのは、茶屋の亭主高砂屋徳兵衛だった。徳兵衛は、芝居界で新参だった頃にいつも最貞にしてくれた久吉への恩義を返したい、とこの場を買って出たのだ。

「どうぞこの徳兵衛にお任せ下さい」と出された百圓の大金

助の永い間の夢であった。巳之吉も番頭に昇格した。だが、お象には丹次郎を忘れることができなかった。芸者をひいてからは逢瀬もままならず、想いは募る一方であった。

おそのは、ついに決心をして、日吉町の稽古所に師匠の小澤たえを訪ねた。このままでは夫の丹次郎は会社をしくじるのが目にみえていた。ふたりは、稽古にことよせて逢引きを続けていた。それを、おそのが知らない筈はなかった。

「及ばずながらわたくしが、とっくりご意見申しませう。」と、たえもついに時がきたのを覚悟した。おそのが帰ると入れ違いに、お象が顔を出した。見ればいつもより元気がない様子、何もかもお象は陰で聞いてしまっていた。

「お師匠さん、内々に御相談がありますから、池上の温泉へ行って下さい。」

どうやって切り出そうか悩んでいた小澤たえには渡りに舟であった。着替えに立った所へお座敷をひけた政吉が帰ってきた。ついでこの間、半玉から一本になったばかりと思っていたのに、政吉はいつの間にかこんなに女らしくなったのだろうか——お象は動揺した。

そして口には決して出さまいときめていた噂、大事な丹次郎とこの政吉が、とうから筋になっているという噂をついに口の端にのせてしまった。さすがに政吉も、可愛い口をとんがらかして怒ったものの、お象にうまくいなされた。この様子を目の当たりにしたおたえは、しみじみお象が哀れに思えた。こんな子供供の政吉とまで張り合うお象にどうやって丹次郎との縁を切らそうか、——たえとお象は、それぞれに思いを抱きつつ、仲良く新橋ステーションへ急いだ。丹次郎が後を追ったのは言う迄もないが、しかし、この時の丹次郎には、すでにお象の心中に生まれていた決心を知る山もなかった。

たえは、顔みしりの野太八と時間をつないでいた。池上温泉へ着いてからお糸が大事な簪を落としてしまったが、それを拾ったのがなんと、九郎兵衛だった。

「お礼にちよっと御座敷をつとめて上げましたのさ」と、座敷へ入ってきた時は、もうしたたか呑んだ様子、たえは思わず野太八と顔を見合わせた。

お糸は酔っていた。簪も九郎兵衛も、何もかもむしゃくしゃしていた。

「なみなみと、いっばいおつきよ。」と野太八にからんだ。

「いいえ、半分でござりましょう。」

「ええッしみたれたことをおしでないよ。」と、お糸は水吞、

三幕目 池上温泉縁切の場

待合水月女将

金井お糸

歌

江

深見丹次郎

勘之丞

箱廻し野太八

錦

弥

朝日楼女中ふで

由

蔵

朝日楼女中

黒川

資

同女中

小島

清一

周旋人春野笑蔵

光

紀

同 駒野勇助

紀

義

金貸赤鬼九郎兵衛

吉

次

一節師匠 小澤たえ

左

升

の酒を野太八にぶっかけた。たえは、ついにはじまってしまった、と廊下を見やった——、丹次郎さんはどうしたのだろう、早く着いておくれと、祈っていた。

案内の女中に連れられて、急いで追ってきた丹次郎を見るなり、お糸は、

「遅いぢゃあないか」と、ついに爆発した。

この時丹次郎は、またいつもの癪癪が始まった、とこらえていたが、どうも今日の様子はただならぬ。飲めないを承知で酒をすすめるわ、今さら会社づとめをそしるわで、止めようもなく続く深酒は、ついに朋輩の米八の名前が飛び出した。たえは顔色を変えた。

お糸はすでに蒼白の思いで口を切っていた。

「悔しいけれど米八さんに見返られた上からは、愚痴を言っても仕方がないから、きれいに別れてしまおう積もりさ。」

「別れる……」——丹次郎には思いもかけない言葉だった。宴会でそれは米八と一緒にいる時もある、しかし、米八から見返られた、とお糸が悔しがるようなことは全く身に覚えのないことだった。さすがの丹次郎もついに、張りつめた糸が、切れた。

たえの仲立ちも虚しく、座敷を去っていく丹次郎が廊下へ消えようとした時、

「丹次郎さん、待っておくれ」とお糸が声をかけた。

「切れた女に用はねえ」と行きかかる丹次郎に、たえは、せめて待ってあげて下さい、と頼んだ。

お糸は、簪と金の指輪をはずすと、是でいつぞやの借りを返したい、と言った。丹次郎には、これが女の手切れと思われて身が震えた——お糸はこんな女だったのか。

すてげりふを残して丹次郎が帰ったあとの座敷は、暴れ呑みの地獄であった。お糸はついに酔い潰れた。呆れたものの、たえは、そっとお糸の介抱をすると引き揚げていった。

あとには、ひとり横たわるお糸。鐘の音。やがて顔を上げたお

糸は、

「酒に酔ったを辛いに、心にもない愛想づかし、どうぞ堪忍してくださいまし。」と泣き崩れるのだった。

暗がりに立っていたのは、お糸だった。

「巳之吉、わたしだよ。」

「誰かと思ったら、姉さんか。」

五日も家をあげたあげく、こんな真夜中におれを呼び出して、へいってえ、なんのつもりなんだ」

と巳之吉は憮然としていた。

水月を出たすぐ角で、待っているお人がいます——と車夫が使

いに来たのでやってきたが、巳之吉は、ひとめお糸を見て驚いた。

へなんてやつれたんだろう」

「おとつあんは、おこっているかねえ。」

「お察しの通り大おこり、お客様がたてこんで、今度こそは家

へいれねえと——。」

会えば小言の巳之吉は、まるでおやじ気取りだ。

四幕目 大川端箱屋殺の場

待合水月女将

金井お糸

歌

江

大川端 車屋

吉

弥

同

吉

六

箱廻し 巳之吉

幸

右

衛門

か。

「そりゃあそうもうしょうが、それにはひとつ、詫びを入れなせえ。」

「なに、わたしに詫びろとは」

「あっしが、頼んであげましょう。」

「なに、お前なんか頼むものか。」

「強がり言ってもこの真夜中、目先の見えねえ話だ。」

「これ、手前はおれをなんだと思う。奉公人と主人だぞ。」と、お糸はキツとなった。

巳之吉は新富町を追い出された時、全盛のお糸に拾われた。行くあてもない時に助けられ着類持物もふえた。その大恩は誰のお蔭だ、とお糸は言い募った。

ふしぎなことに、さんざん悪態をついたら、お糸は気が晴れた。こんな恩知らずを相手にした事を後悔したその時、

「さあ、今夜は泊めてあげますから、わたしと一緒にまいりま

しょう。」

と、巳之吉が近づいてきた。

「ええ、余計なことを」と、お糸は思わず巳之吉の顔を打った。帯の間から何か包んだ物がさっと落ちた。それは、出刃包丁

だった。

「てめえ、おれを殺す気か——」と驚く巳之吉。見合わずお糸

「この包丁は、人を切るためぢゃあない。死のうと思つて買った包丁——。」

お糸は自殺を決意していた。せめて立派に自害して果てること

が、せめてもの父親にたいする親孝行だと信じていた。

揉み合ううち、気がつくとお糸は巳之吉の身体に出刃を突き立

てていた。

モデル論議しきり

◎「花井お梅」は明治二十一年、中村座で初演された。黙阿弥七十二歳のときである。

事件は、前年の二十年六月九日の夜中、浜町川岸の路上で起き、待合酔月の女将花井梅が箱屋の八杉峰吉を刺し殺した。黙阿弥は早速この事件を書きおろし、お梅をお象、峰吉を巳之吉にした。題名も「月梅薫臘夜」とし、「花井お梅」は副題にうたった。

お象・巳之吉と役名をもじったのは、当時の世間をばかっの事であった。

同じく深見丹次郎も、実際の事件ではさる人気役者であったが、やはり芝居界への遠慮から勤め人にした。この役者が、四世源之助であることはモデル論議で有名である。

木村錦花氏に次のような文章がある。

「喜代次、源之助、花井お梅の三角関係は誰も知っている話であるが、その当時お梅は秀吉といった新橋一流の芸者であり、喜代次は櫓下（新富町）の芸妓であって、その貫禄から言っても喜代次は到底秀吉に対立できる芸妓ではなかった——（略）」

この文章を掲載した「澤村源之助」という本の著者佐藤齋子氏は、さらに次のように書いている。

「花井お梅が源之助を最良にしようと思ったのは、明治十九年一月の新富座で、「英国孝子伝」（西洋嚙日本写絵）の時からで、その翌年の二十年六月に箱屋を殺しているので十五年十一月の襲名（四世源之助）の頃は源之助とは知り合っていないし、お梅は、元治元年（一八六四）の生まれなので、源之助の襲名の頃は十九歳位でした。」

この様に源之助がモデルである事は、たしかに周知の事実らしい。ただ著者が襲名云々にこだわっているのは、後々の劇化の舞台が襲名のために事件が起きたように書いたからである。この点、黙阿弥は深見丹次郎で書いたから問題ない。ただ遠慮の役者が源之助であった事はたしかなようである。

このように、この事件はモデルの事でも話題が多かったのである。

◎ご参考に、以後の「花井お梅」の代表的な二つの舞台を表にしました。

真山青果 Ⅱ 作

仮名屋小梅

大正八年十一月 新富座初演

津の国屋澤村銀之助をめぐって、酔月女将の小梅と芸者蝶次の三角関係に、一中節の師匠の宇治一重をからませて見栄っぱりの小梅、門閥に反抗する銀之助が描かれた。小梅に紛した河合武雄の五代目菊五郎に劣らぬ酔態の演技がこちらにも評判となった。

川口松太郎 Ⅱ 作

明治一代女

昭和十年十一月 新富座初演

人気役者澤村仙糸と叶家の芸者お梅は深く愛し合っていた。お梅の先輩で仙糸をお梅にとられた芸者秀吉は勝気な女で二人の仲を裂こうと邪魔をする。やがて仙糸に襲名の話がおきて大金が入用となり、お梅は箱屋巳之吉に是を頼んだ。巳之吉は田畑を売って大金を作ったがお梅を仙糸からはなす事ができずに騙されたと絶望した巳之吉は浜町河岸でお梅に迫ったが逆に刺されてついに命を落した。

◎初演の舞台から今回上演にゆかりの配役を一部ですが表にしました。
今回のお梅・巳之吉ほかの配役とくらべながら、懐旧のひとつときにどうぞ。

| | | |
|-------------------|----------|--|
| 宇田川屋久吉 後に水月のお象 | 五代目尾上菊五郎 | 〔注〕五代目は初演で弁護上大河逸蔵も勤めて評判になった。徳兵衛と傳之助の二タ役を勤めた福助は二世梅玉と思われる。巳之吉の松助は勿論有名な四世松助で、この役の原典ともいえる。この表に後の新派配役も比較したら興味は尽きない。 |
| 箱廻し巳之吉 | 尾上松助 | |
| 深見丹次郎 | 坂東家橘 | |
| 小澤おたえ | 坂東秀調 | |
| 高砂屋徳兵衛 | 中村福助 | |
| 金井傳之助 | 中村福助 | |
| 金貸九郎兵衛 | 中村傳五郎 | |

情報短

金井お糸

歌江

○：念願の「花井お梅」上演に恵まれて充実の歌江さんは、七月は稽古と挨拶廻りで多忙の日々。合間をぬってまっぴら心掛けたのは何と減量。「お梅をなさった方々は皆さん有名な先輩ばかり、その姿が目には焼きついて……」とせめて痩せることからはじめたという。打合せでは、熱が入ると身振り手振りで花柳章太郎から、大矢市次郎の巳之吉まで登場する。この面白さは抜群で、めったに見られるものはありません。非公開？の役得であります。

金井傳之助・箱屋巳之吉

幸右衛門

○：葉月会といえば、「歌江・幸右衛門」のコンビでお馴染み、この二人が組んで「お梅・巳之吉」を上演するのですから評判は上々です。幸右衛門さんは、七月の大阪中座公演を終えて帰京するや、早速に稽古へ入りました。「歌舞伎で巳之吉をやるとは思ってもみませんでした。いきのいい箱屋をお見せしますよ。ただ傳之助は親父でしょう、私も歌江さんの親父をやるようになりましたか」と苦笑い。先程、俳優協会の演劇賞を受賞して、「今年は春から縁起がいいんですよ」

一節師匠 小澤たえ

左 升

○：「どんどろ大師」「四谷怪談」以来久しぶりの出演。こと

に「どんどろ」では、延寿・左升の尼僧コンビが評判だった。先代からの門弟で、前名滝之丞は懐かしい名跡、菊五郎劇団の美貌の脇女形で活躍した。昭和五十四年市川左升を襲名、現在の左團次さんの、こちらもよきお師匠さんで重きをなしている。

高砂屋徳兵衛

又 蔵

○：中村又五郎一門の筆頭、上智大学文学部出身はやはりユニークな履歴である。昨年の葉月会で姐妃のお白の美濃屋重兵衛を演じてやはり貫禄の舞台を披露した何よりの強みは学歴の申す如く国際的な活動範囲である。いともかたんにヨーロッパへ出掛けてはサッと帰国する。八月もシェイクスピア研究の仕事と掛け持ちの忙しさ、こちらは芝居茶屋の亭主という江戸の純生とでも申しましようか、葉月会ならではの役廻りをまた見せてくれる。

深見丹次郎

勘之丞

女房 その

梅之丞

○：珍しい夫婦役の二人は、ともに歌舞伎研修第一期の卒業で、名題昇進もはたし、脇役陣の中堅にさしかかっている。勘之丞さんは、中村勘九郎さんのお弟子、梅之丞さんは、先般尾上梅幸師匠を亡くしている。ともに葉月会ではお馴染みの出演だが、この夫婦は揃って会う場面がなく、今流行の「形ばかりの夫婦」を実践している。

黙阿彌・風のなかで

持田 諒

(演出)

浜町の待合「酔月」の女将が使用人の箱屋を殺した明治二十年という年は、東京・横浜間を六人乗りの乗合馬車が走り出してより、新橋・下関間を直通特急列車が往復するようになる明治という時代の中間で、轟進する列車に似て欧化対策が頂点に達している時でした。鹿鳴館では華かな仮装舞踏会が催され、外相邸では天覧歌舞伎が開かれ、歌舞伎の社会的地位や俳優の人権向上に努力する人々が劇界陋習打破を旗印に旧きものへの指弾を強めている頃でもありました。不平等条約を撤廃して西欧と対等の立場に立たねば植民地化の惨状は逃れられないとする政府の意向が欧化政策の強行へと直進したといえます。そうした歴史の急流の底で流されまいとする小石のような想いもあり、時流の責め木の下で時に「事件」となって表象化します。

「花井お梅の事件」は殺人の動機が一時の激情というだけで判然としなかっただけに、時代の劇作家達が世々書き改めていくこととなります。事件の翌年、明治二十一年四月中座初演「月梅薫籠夜」は、明治開化の風俗が纏綿とする中で、旧藩士の血を誇りにした芸者上りの女将お糸が生酔の姿で爆発させる時流への鬱積と自分を芸者に売った男(親)への怒りが奔出しています。作者・黙阿彌、七十二才。演劇改良の逆風を受けて、天覧歌舞伎に自作狂言「高時」「伊勢三郎」「土蜘蛛」を上演されながら招かれる事になった江戸狂言の貞柱、「日本のシェイクスピア」(坪内逍遙著述)は、三百篇を超える劇作の筆を重ねながら弁明も追従もせず謹厳美直な生活態度を変えようとしませんでした。その黙阿彌がただ一度、周囲を驚かす激しさをみせたことがあります。「お梅」上演の翌年、次女お島を二十八歳で失った時です。画才は秀れ将来を囑望され

た愛娘への哀切を盛大な葬儀で表します。葬列が十丁余に及んだ別離は、「大日本帝国憲法発布」の年の暮でした。

四年後、その黙阿彌は「密葬の他はすべからず」と遺言して、十年前自分が予告した通りに、七十八歳の天命を眠るように終えるのです。

「葉月会」の開花を、中村歌右衛門・指導「東海道四谷怪談」とみている私は、於て示した加賀屋歌江さんの芸質の確かさと芸層の厚さに改めて日頃の精進を感じ入ったものでした。歌江さんが成島和男さんと「埋れた古典狂言の復活」に挑まれるに当って、松本幸右衛門さんを相手役に迎えて「敷島物語」を皮切りに「五人女」「傾城重の井」「恋蘭鶴飼療」「御伽草紙白物語」を不備な状況下で完う出来たのです。更に、藤車さん、大蔵さん、権一さん、駒助さんといった歌舞伎界の表皮の内の脊椎のようなベテランの参加が作品を厚くし、公演を十四回も続けられる原動力となりました。今回の「月梅薫籠夜」は主人公お糸の苦悩、狂乱、後悔と変転する心情に、おたえ、徳兵衛の友情、父親傳之助の苦衷と愛情が絡み、巳之助の微妙な立場が言葉一つで殺人事件に発展していきます。久しぶりに参加の左升さんに又蔵さん勘之丞さん梅之丞さん吉次さんを軸に若い演技陣が盛り立てます。稀音家政吉次師の意欲的な、葵太夫さんの義太夫、辰夫さんの立師と協力的な支えに、衣裳、かつら、床山界のベテランや大道具、小道具の積極的な協力、美術、舞台、照明、音響効果、舞台監督の創意が、炎暑の中を御来場下さるお客様にどう届けられていくか、勉強の場を与えて下さった方々への感謝をばねに、稽古は一段と充実しています。

花井お梅／周辺の真実

芝居・新内・俗曲に、歌謡曲にまで歌われた花井お梅は実像・虚像が入り乱れている。
 黙阿弥の「花井お梅」上演を舞台裏で運んできた人々の感慨や懐旧を座談形式でまとめてみた。(編集部)

- 司 お梅の企画はいつ頃からか——その辺からどうぞ。
- 黙阿弥全集をひろげる度に、いつも企画には出ていたんですが——。
- 結局見送られて全集を閉じると、なんか後ろ髪を引かれるような気がしていた。
- お梅が引いていたんだ、きっと。——必ず出してくださいよ、って。(笑)
- なにしる五代目さん以来ですから、この「花井お梅」をだすには勇気がいります。
- 当時は社会を活写せよ、という演劇改良会の方針があった。だから事件が起きるや、先ず黙阿弥が書き、それなら俺がやろうって、五代目も乗り出した。
- 明治二十年の六月九日に事件が起きて、翌年の四月には幕をあけたんだから早い。
- この芝居は、不思議ですね、脚色の歴史に他では見られない魅力がある。

新時代の芸者お梅

- 司 事件の現場はどの辺なんですか？
- 今の浜町二丁目だそうです。
- 浜町といえば、明治座がすぐそばだし、新派も縁が深かったわけだ。
- 「浮いた、浮いたを浜町川岸に——」という歌の文句にまで歌われて、お梅というのは時代を超えてきている。
- 今年は何から丁度百年目とか。
- 新内・小唄・歌謡曲にまで歌われた女はそうはいないでしょう。
- 何だろう、お梅の魅力は。
- 美人だったそうですね。芸者といっても、今の芸能界に匹敵する人気があった。
- 鹿鳴館時代の芸者ですから、洋装も似合わなくてはいけなかった。
- なるほど。例の、ロブデコルテの時代だな。
- 十七歳のお梅の、そのデコルテの写真を見たことがあります。
- 江戸前の芸者というイメージだけではなかった。
- パーティ全盛の頃で、政治・外交の顯官たちに交じって西洋を日本に移植するためにひと役も、ふた役も担わされていた時代の芸者だ。
- 葡萄酒で乾杯だし、若手が持てた。二幕目の芸者政吉の役には意味があるんだな。

- 真山青果も書き、川口松太郎が書いているし。何だろう。
- なんか劇化してみたい衝動にかられるものが、お梅にはあるんだな。
- 口火を切ったのが、黙阿弥。
- 作家三人は、明治・大正・昭和をそれぞれ代表しているところが面白い。
- ほんとだ。まるで企画したように、配置されているね。
- 川口劇は、昭和十年に現れた。有名な「明治一代女」青果の『仮名屋小梅』が大正八年だ。
- 黙阿弥が明治二十一年。
- 黙阿弥は、当時の世間をはばかって「金井お衆」としたが、副題に、はっきりと「花井お梅」を使っている。
- 義太夫を使っているところも、じつに歴史的なんだな。
- この数年後に黙阿弥は亡くなるけれど、あそこまで書いていたのなら、もし大正の空気を吸っていたら、どんな戯曲を残したか。
- 真山劇、川口劇が遠くなっていく速さを思えば、平成の今、「花井お梅」が上演されるのは、不思議な巡り合わせといえ言えるね。
- 紅葉館で華族様の会議とか政吉が言っている。お梅が文明開化の芸者だったという事を見逃すと思う。
- お梅の焦躁も、そんなところにあったかも知れない。
- 芸者の人気投票が盛んな時で、新聞と花柳界は直結していた。
- そのベストワンが殺人事件をおこしたんだから、騒ぎは想像以上だろう。
- それも、箱屋を、だ。
- 巳之吉は本名が八杉峰吉。あまり実像が伝わっていない。
- 親父は金井傳之助。佐倉の下級武士で、やむなく車夫になっていたそうだ。
- 実際はお梅の経済力に助けられていた。帳場のセリフでも、水月はお前が買ったんだとはっきり言っている。
- お梅にも、その自慢ぐらい許されていいわけだ。ただ、いすかのはしと食い違っていった。
- お梅が武士の娘だった運命は、いい面にも、悲劇にも現れたね。
- ひとつは、出刃包丁の一件だ。

出刃包丁の謎

- 司 なぜ、持っていたんでしようか。
- 侍の娘という生まれが、いざという時に出了。自害のために新品を買っている。
- 綺麗に死にたいという一心で、死に方にこだわったの

が、後に誤解を招いた。

それは、巳之吉を家来のように思っている所にも現れていますね。

台詞にもありますよ、「あたしは主人だよ、奉公人のお前は失礼だよ——」

そうそう、あれはお梅の男まさりというか、誇りというか——。

あのセリフは凄いですね。黙阿弥の真骨頂です。

ざんぎりっていうのは、扮装だけじゃない。あのイキはたしかに新世話物だ。

風俗ばかりじゃなくて、日本語という点でも「新世話物」なんです。

だから、ざんぎりは、舞台資料館だ、という人も居る。

そう河竹先生は「近代演劇の展開」という本でそれを強調されている。もっと上演されているのは、ざんぎりではないか、と。当時の資料が一杯なんだな、たしかに。

黙阿弥が「花井お梅」であの日本語を残した事を貴重に思う時がきました。

他にも鉄道の汽笛とか、ラッパの音とか「ざんぎりの音」の世界。

下座音楽とのミックスが不思議な世界を現出している。

担当の稀音家政次さんが、久し振りでやり甲斐のある仕事だ、と言っていました。

再演はほんとに多くの力が結集しないと実らない。竹本作曲の葵太夫さんもその一人だし、舞台の効果音担

当も明治を出すのに苦心した。

大詰の送り三重も議論のあった所だが、思い切って上演した。

お梅にしてみれば、初の汚れ役で幕を引いた。よく決心しましたよ。

それに、舞台が立派だ。とても勉強会とは思えない。協力のお蔭ですよ。ほんとにこれは、おせいじでも何でもない。

舞台はモデルを超えた

司 お梅の実像は、どうなんですか。

海音寺潮五郎の「悪人列伝」に高橋お伝はのっている

も、花井お梅はのっていない。当時二十四歳で事件をおこしたから、世間がびっくりして、毒婦とか悪女とか新聞に書きたてられたが、毒婦は違っているよ。

結局、十六年の刑で、明治三十六年に出所した。

出てから、「懺悔譚」を書いているんですね。今更泣き言を言うぢやあないけれども想像で上下されては切ないと思います——って。

国民意識を高揚する時代にあつたって、日本女性のあ

る一生という風に扱われるまでには時間がかかった。

だから後の劇化で、一種の見直しがおきた。情味あるお梅になっていく。

お梅もの、というジャンルが生まれた。最初の事件の取り上げ方に問題があった。

悪質な殺人事件とは違う、という人間回復と言うか、お梅の人間性へ目がいった。

一番そういう事を強調しているのが、黙阿弥の「お梅」なのに、どうして今まで再演されなかったか、不思議です。

真山青果の『仮名屋小梅』も乱酔による一種の心神喪失を描いた。

実録作者らしい。

独自の脚色をしたのは、川口劇の『明治一代女』。お梅の中にある優しさと勝気に注目して、純情なお梅と勝気な秀吉という二人の芸者を配置した。

昭和十年といえば、近代劇の手法を日本風に融解した時代です。

そこへいくと、黙阿弥のお梅は、元祖らしい。素朴で線が太い。

日本画ですね。きりっとしている。いかにも原点というお梅だ。

お梅が士族の娘として描かれていたことの発見は、収穫でしょう。

そういう意味で、「明治一代女」ですね。別の意味で。

この作品が埋蔵されていたのなら、ざんぎりはもっと見直されていいな。

是からだと思えます。発掘は時代の欲求です。遺跡の分野だけではない。

原作も鮮明だし、おこがましいけど明治は近いんですよ。

辞典

箱屋 箱屋は座敷へ出る芸妓に従って、その芸妓

の三味線を箱に入れて持って行く男衆のこととで箱廻しとか、単に箱ともよんでいる。

待合 待合は待合茶屋の略称で、芸妓をよんで遊

興する茶屋である。

ただし、料理は客の注文によって調える程度でそこが料亭とはおのずから違っている。

明治は遠くなりけり、という言葉を二重に生かせばいい。
二重って？
百何十年という重みはたしかに遠いけど、再演できれば引き寄せられる。そういう意味で、明治の特に中期ぐらいは、大事にしたい。
ありがとうございます。このへんで——。

(文責編集部)

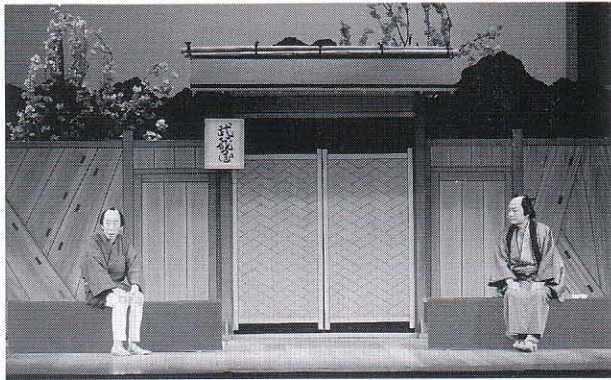
平成6年8月17日

御伽草紙百物語

＝ 姉 妃 お 百 ＝



中川石膳＝辛石衛門
芸者小三の
お百＝歌 江



徳兵衛＝権一
新助＝大蔵



右から
重兵衛＝又蔵
徳兵衛＝権一
お百＝歌 江



方、お百は芸者小三を名乗って中川右膳へ近寄った。次の標的は千葉家乗っ取りであった。殿様の愛妾として千葉家へ上がり、やがて右膳が実権を握ろうという段取りであった。

右膳 例えば殿が寵愛深く、お側をお放しなさぬとも、そちが心を
見込みしゆえ、末は身共が宿の妻
お百 そんなら一旦殿様の、お妾となりましても、あなたの妻にな
られますかえ。
右膳 それぞ日頃の我が大望、成就いたせば心のまま。
お百 その大望とおっしゃるは。

雪の夜に裸で放り出したお高の身には、徳兵衛の胤が宿っていた。その男の子を新助が育てていた。三之助である。

新助 あのお百めは新助の胤腹一つの妹だが、子供のうちとはがらりと変わり、悪魔が見入ったあいつの性根、どうしてあんな心になったのか、わしも合点がゆきませぬ。
徳兵 そうして伴の三之助は、丈夫にしておりますよ。七つになりやしたぜ。
新助 元気にしておりますよ。七つになりやしたぜ。

徳 兵衛は、捨てられた。金策で甲府へ出掛けた留守にお百は逃げた。重兵衛も消えた。あてどもなく、江戸市中を探した徳兵衛はぼったりと魚屋新助と出会った。あの大旦那が、紙屑買いに成り下がった姿を見て、新助は世の中の因果の恐ろしさに身を震わしたが、一体お百はどうしてるのか？

運命の出会いだ。たちまちお百は、美濃屋重兵衛の江戸ふうで身なのよい男伊達に惹かれた。行儀良く並んで土下座をしているお百だが、再び野望が燃え出した。

徳兵 見え、すりやお泊めなされてくださりますとか。
重兵 捨つる神ありゃ助ける神と、
徳兵 旦那様、
両人 有難うござりまする。

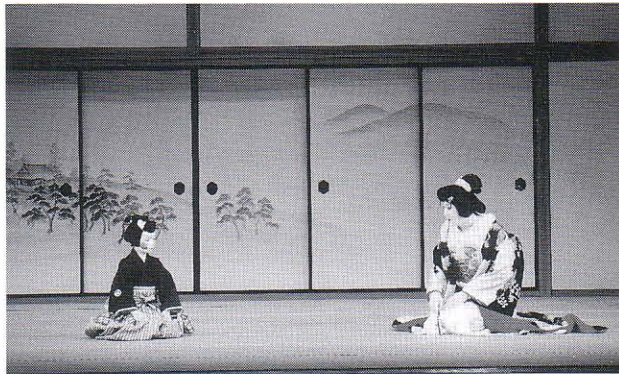
世 界を駆けめぐる姉妃が日本に現れた。姉妃のお百であった。幕末の大阪随一の廻船問屋桑名屋徳兵衛をたらしこんだお百が正妻のお高を追い出して居すわるや、土蔵から出火した不審火は徳兵衛の屋敷を全焼させた。そして無一文で逃げてきた江戸の夜、難儀を救ったのが美濃屋重兵衛だった。

御 伽 草 紙 百 物 語

＝ 姐 妃 お 百 ＝



お秀の方
実ハ姐妃お百＝歌 江



お秀の方
実ハ姐妃お百＝歌 江
一子 三之助＝白岩 亮



お百＝歌 江
お熊＝紫 若
徳兵衛＝権 一

目前の野望を前にして、たった一つの邪魔は、徳兵衛の存在だった。お百はあとを付けられていた。たった今、暴れこんできたばかり——。お百は、徳兵衛を殺さなければならぬ、と決心した。

砂

村横堀で繰り広げられた惨殺は、お百とお熊、徳兵衛の三つ巴であった。

お百 おい徳兵衛さん、静かにおしよ。お前がいくら怒鳴っても、人里離れた十万坪、聞き手はわたしとおっかあとの石の地蔵と三人きり、凄味なことを言うようだが——姐妃のお百と言われるだけ、尻尾を見せたこととはねえ、三国わたったこのお百が亭主殺しの殺生石、これから千葉のお妾で飛ぶ鳥落とす勢いに、なつて悪事を那須野ヶ原、草場の影から徳兵衛さん、わたしの出世を見物おしな。

徳兵衛はついに息たえた。それでもお熊の髪を放さなかった。その指をお百が切って捨てた。

総

禅寺で行われた千葉家の御跡取常若君のご法事で、側室にまで出世したお百の前に現れたのは、三之助であった。三之助は玄海和尚に預けられていた。人前をはばかったお百は、本堂へ皆が席を立ったあと、ひそかに三之助と体面した。なんとあのお高にそっくりなのであろう。

お百 跡見送りてお秀の方、三之助にうち向かい、
お百 これ、三之助とやら、そなたは大事な母を殺されし
そのお妾とやらを、さぞかし憎んでおいでぢやろう
のう。
三之 早く大きくなって、母さまの仇を討ちとうござりま
する。
お百 さればいもう、仮にそなたの修業がみのり、仇のお
百が現れたとて、お百の顔を知らぬそなたに、どう
して仇が討てようぞ。
三之 母を殺せしその人は、あなたのように左手の、手首
に深き傷のあと。新助の伯父さんから、剣術の稽古
の度に教えられました。
お百 聞いてびっくり、
何、新助の伯父さんが、そなたにそう教えてきまし
たか。あの、新助さんが、手首の傷を。

お高を土蔵の中で責めさいなんだ時、必死で喰いついた歯あとが、今もくつきりと手首から消えないのだ。それを見るたびお百は気味が悪く、ぞっとしていた。
それを知っているのは、新助しかいない。思わず手首を抑えたとき、お百はおのれの命運を見た。

百

物語の終焉は奥庭であった。千葉家の忠臣に取り囲まれたお百は、三之助の太刀すじをよけず、自ら取って胸に刺した。せめて、父徳兵衛と母お高をあやめたお百の償いであった。

『明治演劇史』 (伊原敏郎著)

Ⅱ近代かぶき風雲録Ⅱ

前回は、幕末から明治改元への芝居界を、九代目團十郎が世に出る迄の風雲を読んで参りました。今回は五代目菊五郎です。

五代目菊五郎と言えば、「弁天小僧」の初演が有名です。

まず、「弁天小僧」の誕生秘話から参りましょう。

初演は、文久二年の三月で、なんと菊五郎、十九歳のことであります。

この人気狂言の誕生を、菊五郎自身が語っております。

『その頃、帳元をしていた澤田屋和助の手代をしていた直助という人がありまして、浅草馬道の酒店から二三軒さきの絵草紙屋から買ったというのですが、豊国の描いた一枚絵の見立で、私の弁天小僧が緋縮緬の長襦袢を着て、島田髷が横に崩れ、それに緋鹿子の切れが掛かっておりまして、解き荷へ腰をかけ、抜身の刀を畳へ突き刺し、銚子で酒を呑んでいる絵を狂言部屋へ持って参りました。』

『わたしもそこに居合わせまして、これは面白い描きだ、一つやってみたいが、其水さん(河竹新七) 何かに書き込んで下さい、というのでそのまま舞台へ出してしまいました。』

翌日、直助が、またこういうのが出ていたと言ったので持ってきたのが、芝翫さんの似顔絵で、日本駄右衛門が背中一杯鷹の羽根をひろげている模様通りの着付けで、刀をくわえて親船から飛び下りている絵なのでございます。

その翌日、今度は其水さんが買って来ましたが、やはり芝翫さんの似顔で南郷力丸が虎の皮をかぶって青竹の先をとらまえ、さかさまに川をこえている所なので、これは五人男になるだろう、と言った居りますと、その次は権十郎の似顔で忠信利平、桑三郎の赤屋十三といった具合にととう五人揃ったので、いよいよやって見たく、また其水さんの方でも書くことになっていたのでありますが、ただ五人男だけでは興がうすいというので、通し狂言に替えることになったのでございます。

冒頭から、長々しく引用したのはほかでもありません。楽屋の雰囲気がこれほど如実に描写された文章も珍しいと思うからであります。狂言部屋へ顔を出していた十九歳の菊五郎が、ひょいと一枚の絵草紙に目がいくと、そこに居合わせた後の黙阿弥(其水)に、ちよっと書きこんでおいて下さい、と頼んで舞台へ行ってしまおう。すると今度は、黙阿弥が絵草紙を買ってくる。おそらく、早速に五代目の部屋へ持ち込んで、時間を忘れて話し込んだのではないでしょう。五枚の絵が揃ってみると、一人一人ぢや、つまらない、通し狂言にしてやってみようといふ話がかぶらんでいく様子が見えるようではございませんか。

「弁天小僧」はこうして生まれました。もちろん、キャラクターの発見や、想像の展開も大切だが、何よりもそれをあれだけの通し狂言へ仕上げていく創作力は物凄いのですが、いつも芝居の事で頭が一杯の楽屋ならでは、絵草紙の発見も、買い揃えも、イマジネーションの飛躍も、結晶しないのではないのでしょうか。

昭和二十年代の楽屋にも、まだこうした雰囲気は随所に横溢していて、狂言部屋とか頭取部屋へ遊びに来ていた幹部さんが、裏方からかいながら色々な芝居の話に興じていたものであります。閑話休題。

さて、五代目菊五郎の出世はどんな風雲をはらんでいたのでしょうか。

五代目菊五郎は市村座の座主の子供で、同じく河原崎座の座主の子供であった九代目と似た出生でしたが、二人の決定的な相違を著者は次のように書いています。

『五世尾上菊五郎は市村座座主で俳優を兼ねた十二世羽左衛門の次男で、弘化元年六月四日、浅草猿若町二丁目で生まれ、幼名を九朗右衛門と称した。座主の子である事は九世團十郎も同じであるが、彼は控櫓であり、これは本櫓である。その劇場の格式から言えば菊五郎の方が上位である。』

後に明治の劇聖とうたわれた九代目と五代目だが、生い立ちはまるで違っていました。

九朗右衛門が八才の時、実父が退引して、彼が座主となり、十三世羽左衛門と改名したが、当時は十五歳以上でなくては家督相続出来なかったもので、名主に頼んで八歳を十五歳と書きあげて相続する事をえた、という。一事が万事このように恵まれた環境で育ったのが五代目でした。出世芸は、名人小團次の演じた「鼠小僧」で蛭壳三吉をつとめ、子役として初めて世に出たのは有名。十四歳の時です。

『同年五月、坂東亀蔵を烏帽子親にして、はじめて前髪を剃り落とし、十一月は相中役者の直安(ねやす)芝居で「太十」の十次郎、「油屋」の久松、「吉田屋」の伊左衛門をつとめた。』

このへんは御曹子の面目躍如たるものがあり、相中とは今の名題以下と考えてよく、下級役者の分担芝居とはいえ、そこへ入って狂言の主役を努めて活躍していた風景が彷彿としてきます。

こうして、「弁天小僧」の初演というチャンスを手に入れたのです。

Ⅱ新東京で客層かわるⅡ

やがて家橋時代をへて時は明治となり、その元年八月に五代目菊五郎を襲名しました。

『一体に菊五郎は早熟の方で、團十郎よりは年下であるにもかかわらず、世間から技量を認められたことは菊五郎の方が先であった。たった十九歳で新作の「弁天小僧」をつとめた事実がそれを証立している。そうして團十郎が専ら時代物をしたのに対して、彼は世話物を得意とした。』

あらゆる歌舞伎史は九代目と五代目をこのように比較します。これは定説と言うべきかも知れないが、「明治演劇史」の優れている点は、時代物を好んだ観客の増大に比べて、粋な世話物の観客が減少していった「東京」の新観客層を指摘している点であります。

『しかし彼が時代物役者となったのはそればかりではなく、もっと根本の理由がある。即ち第一は彼自身の性格である(中略)、第二に世間の風潮である。明治維新の結果江戸が東京に変わって、廟堂をはじめ市井にまで地方の人が澤山入り込んだが、彼らに旧時代の社会を写した世話物は解しにくい。それよりも、歴史や軍談で読んだり聞いたりした時代物の方が、分りよくて興味がある。』

新東京はすでに昔の江戸ではなかった。地方の人にとって、火事と喧嘩の江戸はむしろ関東の一江戸の白慢であり、それよりも自分達の地方に伝わる史実や郷土史の話を舞台で見られる方が面白い。これは当然の成り行きでしょう。

一方、世話物を得意とした菊五郎は、この新東京の変化に対して「活写」の精神を舞台へ生かそうとしました。「さんざり物」とか「新世話物」と呼ぶジャンルだが、演劇改良運動が到来する明治中期の苦難は、こうして九代目より五代目に重くのしかかってきたのです。以下、次回へ送ります。

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|----|------|------|------|-----|-----|------|------|----|-----|-----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|------|----|----|----|----|---|------|----|------|-----|----|----|----|---|---|---|---|----|---|---|---|----|----|----|---|----|---|----|---|---|---|
| 仙波大 | 出中 | 鳳中 | 浅田 | 田中 | 田中 | 福原 | 田中 | 田中 | 望月 | 田中 | 田中 | 田中 | 松永 | 杵屋 | 松島 | 杵屋 | 杵屋 | 牧住 | 吉住 | 吉住 | 杵屋 | 柏庄 | 芳村 | 伊十 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 明 | 太郎 | 由 | 興 | 竜 | 九 | 二 | 郎 | 郎 | 次 | 八 | 郎 | 郎 | 助 | 吉 | 郎 | 衛 | 朗 | 郎 | 朗 | 介 | 郎 | 小 | 一 | 咲 | 七 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 頭取 | 立師 | つけ打ち | 狂言作者 | 竹本作曲 | 三味線 | 浄瑠璃 | 鳴物指導 | 長唄指導 | 附師 | 稀音家 | 政吉次 | 美術 | 碓山 | 喬 | 康 | 照明 | 富田 | 修好 | 音響 | 加藤 | 洋明 | 舞台監督 | 杉山 | 美樹 | 金井 | 大道 | 具 | 日本演劇 | 衣裳 | 東京演劇 | かつら | 東京 | 鴨治 | 床山 | 山 | 岡 | 光 | 峰 | 床山 | 藤 | 浪 | 小 | 道具 | 台本 | 葉月 | 会 | 文芸 | 部 | 制作 | 葉 | 月 | 会 |

編集だより

○：激動の平成七年、いかに炎暑でも今年ほど葉月月を開催出来た幸せを感謝しないではいられませんでした。校了と共に痛感した次第です。

○：来年は第十五回の記念公演になります。皆様の心に残る芝居と舞踊をご覧ください。ただけるよう一期して精進いたします。——と申し上げつつ、そんなに肩を張らずに力まず、初心を忘れずに参りますゆえ、例年にも増してご支援頂きます様お願い申し上げます。

(成島)

発行 平成7年8月16日
〒102 千代田区隼町4-1-1 国立劇場
社団法人 伝統歌舞伎保存会
葉月会
編集部 成島和男
印刷所 ハイビジネス
☎(3265)7411番